

『神学・政治論』(上)(下)

スピノザ著 (吉田量彦訳) 光文社古典新訳文庫 2014年

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

時は17世紀後半のアムステルダム。マイノリティ社会でもあったユダヤ人共同体から、一人の男が破門された。この人物が名前を隠し、どこで出版されたかも分からないように1冊の思想的著作を刊行した。そして、案の定、この本は発禁処分になり、禁書目録の中に入れられた。それが本書『神学・政治論』、著者はスピノザである。

本書は自由を求める叫び声である。自由を認めても、道徳心や国の平和は損なわれない。むしろ逆に、自由を踏みにじられたら、道徳も平和も吹き飛んでしまう。自然の光の下で物を見、自分の心情に素直に考え、それを自分の意見として公言する。これは断じて不道徳の源ではない。それどころか、人間にとって何より大切なことである。スピノザは、聖書を読み解くという形で、人間の自由の問題を解き起こそうとした。

この読み解き方が実に自由闊達で、近代的な批判精神に溢れているのである。

我々が聖書を受け入れられない部分があるとすれば、それは聖書が千年以上もの長きにわたってその時々の民衆の理解力に合わせて編まれてきたためである。そうした部分は思いきって差し引いて読むべきだという。聖書には時代的な変遷もあり、語り口や文体の相違、また他の史実との関連から、本当の執筆者は伝承とは別の人物の可能性が高いこともある(モーセ五書がモーセによるものではない等)。

さらに言えば、聖書には書き誤りもあれば、意図的な編集も見られる。そのような聖書を無批判に崇拝することは、書かれた文字とインクを信じることと同じである。しかしながら、聖書は神の言葉を含んでいるがゆえに、その権威は決して揺らぐものではない。そもそも聖書は、だれにでもあてはまる神の法を説いている。それはすなわち、神の正義と愛を知り、それを人々が生き方の指針にするべきだということに他ならない。このような形で、人々に対して神への服従を説くのが聖書である。聖書の意味を聖書それ自体から引き出してくるならば、自ずとそうなるというわけである。

スピノザの解釈は、20世紀の「非神話化」神学を先取りするような啓蒙的・批判的な性格を持つ。現代人なら違和感なく読める主張であるが、本書は登場する時代が早すぎた。「正義を尊重する真心ある人たちを、ただ自分たちと意見が合わないとか、自分たちと同じ信仰筒条を守っていないといった理由で迫害するならば、そのような人は実は背教者なのだ」(下、114頁)という、きわめてまっとうな意見も、宗教・思想統制下の不寛容な社会では、いかにも挑発的な発言となり、迫害干渉を招きよせるばかりになる。

スピノザは、自然の法こそ神の法に他ならないと考える。この立場からすれば、神の存在や神の法を自然の光によって知り、本当の生き方を身につけているなら、人は聖書の物語など知らなくても依然として幸福である。なぜなら、その人は明晰判明な概念で真実を捉えているからである。聖書を読むにも、こちらに自然の光に即したものの見方(理性)があればそれで十分であって、超自然の光(靈感)は必要ない。

スピノザが戒めるのは硬直した宗教のあり方である。信仰や

儀礼に瑣末にこだわり、社会の中にかえって不和と憎しみをばらまくような者は、どんな宗教を熱心に信じていても、不道徳な、すなわち真の意味で不敬虔な人間である(敬虔を意味する pietas の訳し方にも、スピノザの思想的確に理解している訳者の工夫がこらされている)。

このように、聖書の議論が自ずと反転して、社会や国家体制の批判的・建設的考察に向かうのが本書の特徴である。ただ、本格的な形でそうした考察に入るのは、全20章の内ようやく第16章になってからである。それまでは二枚腰、三枚腰に聖書の分析を行っている。読者の側も、第1章から第15章までは、粘り腰の姿勢で読み進めていかななくてはならない。第16章以降も、たえず聖書、とくに旧約時代の神権政体が批判・克服されるべきという意味で対照され、また同時代のヨーロッパ諸国の政治体制についても論評が行われている。

スピノザは、国民の自由を主眼とした国家体制を理想と見なす。自由を獲得できる国家体制とは、理性にもとづいて諸法を制定している国、すなわち民主体制に他ならない。そこでの至高の法は、国民の福祉である。宗教には国政に口出しさせず、宗教的礼拝や活動は、国の平和や利益と両立したものであるべき等、今日における政教分離・信教の自由の視点を提出していて、大変興味深いものがある。最終章(第20章)は、思想の自由、言論の自由が保障される民主国家への頌歌として読むことができる。

本書の翻訳は、これまで島中尚志氏による岩波文庫(初版1944年)しかなかった。私はその訳書で読んだことがあるが、古色蒼然とした文体で読みづらく、新訳が待たれていた。訳者の吉田量彦氏は新進気鋭のスピノザ研究者である。吉田氏が満を持して光文社古典新約文庫シリーズとして、これを刊行したことに対しては、よくぞ出てくれたと讃嘆を惜しまない。

吉田氏は、ラテン語原書を精読し、各種研究を踏まえて丁寧な註と解説をつけているので、学術的価値も非常に高い。また、この古典新約文庫のモットー「いま、息をしている言葉で、もういちど古典を」の通り、こなれた文章で翻訳がなされ、とても読みやすい。

宗教と政治について問題意識を持つ人々に、ぜひお薦めしたい本である。

